四世同堂

老舍著

鈴木擇郎·魚返善雄
實藤惠秀·桑島信一 譯

老舍著

四世同堂

鈴木擇郎・魚返善雄
實藤惠秀・桑島信一 共譯

月曜書房

四世同堂

第一部 上

昭和26年4月10日　初刷發行
昭和26年7月14日　二刷發行

著者　老舍
譯者　鈴木擇郎・藤原惠雄・黃島信秀
發行者　前田隆治
印刷者　藤本譽

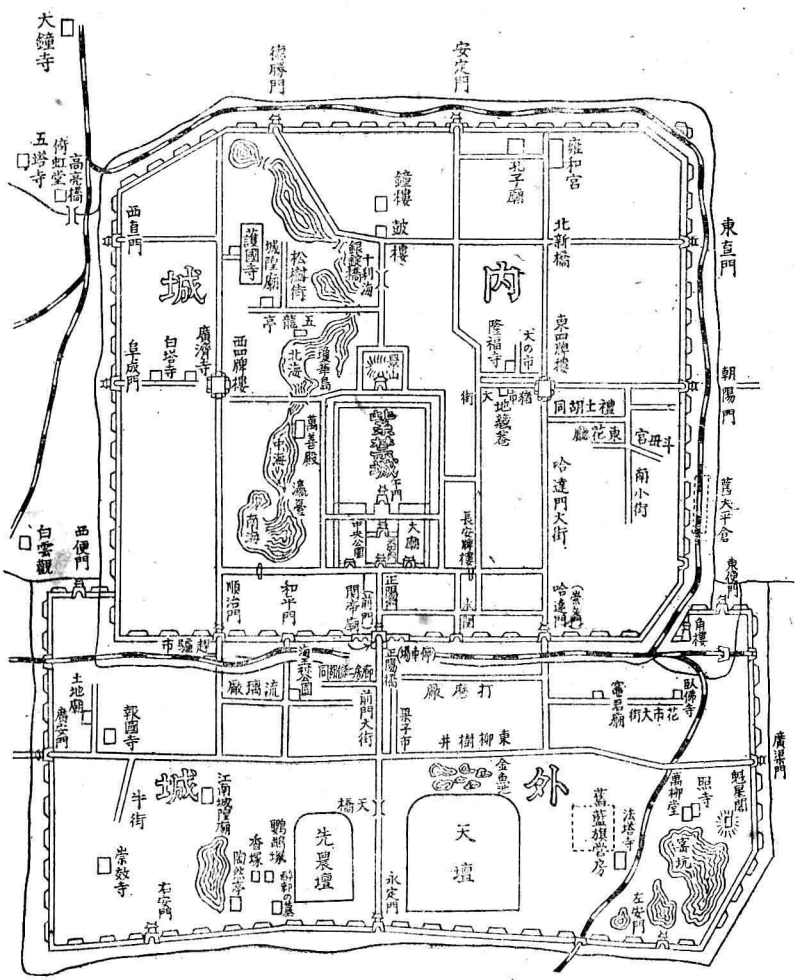
定價 200 圓

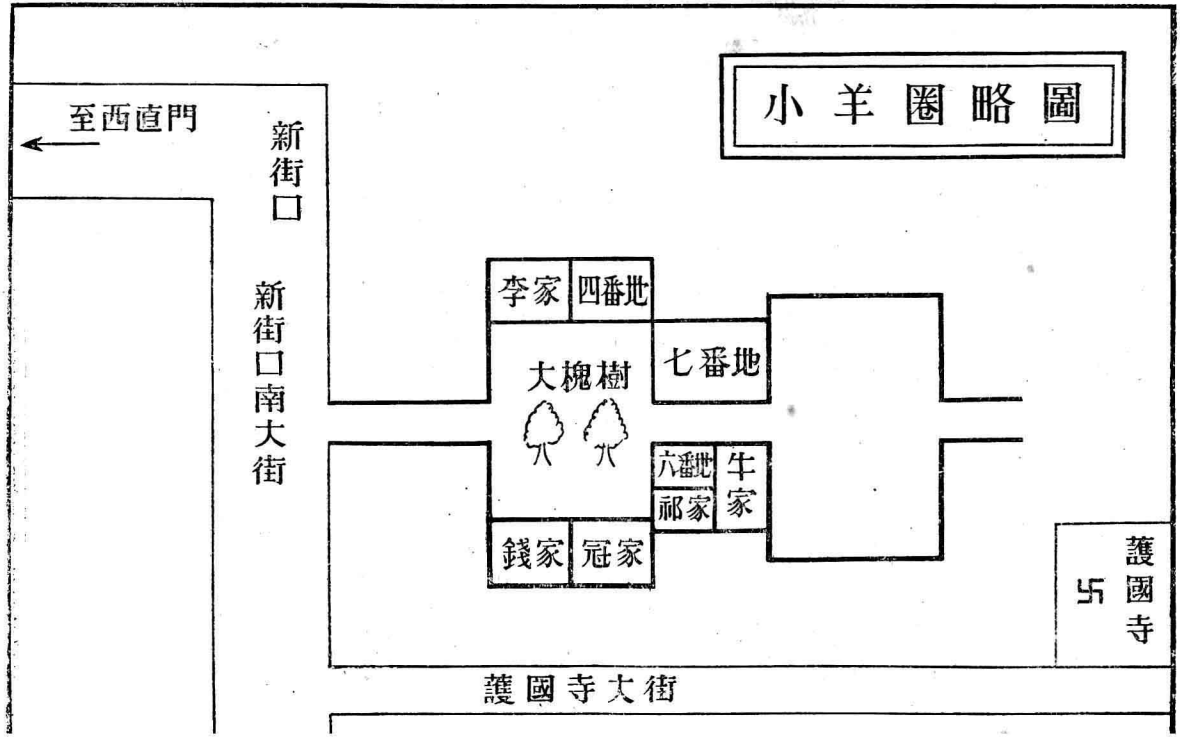
東京都千代田區神田神保町2ノ36
發行所　株式會社 月曜書房
電話九段 (33) 4428番
振替口座 東京 145181番

印刷　綜合印刷株式會社

乱丁・落丁は本社にてお取替え致します

北京全圖


大鐘寺
五塔寺
倚虹堂
高亮橋
德勝門
安定門
鐘樓
鼓樓
北子廟
雍和宮
北新橋
東直門
朝陽門
西直門
皇城門
白塔寺
廣濟寺
西四牌樓
松樹街
銀錠橋
十刹海
城隍廟
護國寺
五龍亭
北海
瓊華島
萬壽山
萬壽殿
中海
南海
紫禁城
午門
太廟
中央公園
長安牌樓
內
天壇
隆福寺
東四牌樓
地壇
禮士胡同
東花廠
哈達門大街
哈達門
南小街
舊太平倉
東便門
角樓
西便門
白雲觀
順治門
和平門
正陽門
前門大街
市場
流璃廠
報國寺
土地廟
廣安門
城
牛街
崇效寺
右安門
南塔寺
先農壇
天橋
鵬鵬塚
香塚
陶然亭
外
天壇
金魚池
永定門
左安門
萬壽觀
法塔寺
富坑
左安門
東柳巷
井巷
打磨廠
臥佛寺
富貴廟
大市街
廣渠門
盤蛇閣
聚寺
柳巷
廣渠門



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一部「惶惑」　上卷

一

祁老人は何も心配することはなかつたが、ただ八十の誕生祝いのできないことを心配している。かれは壯年時代に、その眼で八國聯合軍が北京へ攻め入つたのを見たのだ。そののち、清朝の皇帝が退位したいきさつも、きりのない内戰では、九つの城門が全部堅くとざされ、銃砲の音が夜晝なしにきこえたかとおもうと、いつのまにか城門がひらかれて、大通りには勝つた方の軍閥の車馬がほこらかにとびまわるといつたことも見ている。戰爭だからとて祁老人は驚ろきもしないが、平和になつたからとてべつに狂喜することもなかつた。節期には節期のお祝いもし、正月には祖先を祭つた。かれは一個のつつましやかな公民であり、ただ、しずかに喰うことや着ることに事かかぬ日日を送りたいだけのことである。よしんば兵亂のときでも、かれにはかれ相應なやり方があつた。もつとも語るに値することは、かれの家では、いつも家族全部の三ヶ月分の食料と漬物とを貯藏しておくということである。だから砲彈が空中を飛び、兵士が街をかけまわつているときでも、かれは門をとじ、石をいつぱいつめた破れ甕で戸をおさえてさえおけば、充分に災難を避けることができた。

祁老人はなぜ、ただ三ヶ月の食料と漬物とだけを貯藏しておくのだろうか。それはかれの氣もちでは、北平はあめが下で一番安全な大きな城で、どんな災難があつても、三ヶ月もたてば必ずおさまつて、あとはすべて上々吉になる。北平の災難は、あたかも人間はときどき頭のいたいこともあるが、二三日もすると自然によくなるのと同じようなものだと思いこんでいるにちがいない。その證據には祁老人は指おりかぞえて、直皖戰爭は何ヶ月で、奉直戰爭は何ヶ月だつた、北平の災難は三ヶ月とは續かないんだ、というだろう。

七月七日の蘆溝橋抗戰のあの年には祁老人はもう七十五歳だつた。家のことはもう心を使うことはなかつた。

老人の現在の主な仕事といえば、庭の植木鉢に水をやつたり、昔話をしたり、籠に飼つてある鶯に餌や水をやつたり、重孫、重孫女などを連れ、ごくゆつくり歩いて、街や護國寺などへ遊びにゆくことだつた。しかし蘆溝橋に砲聲がとどろいてからは、老人も少しは家のことにも心をくばらねばならなかつた。なんといつても四世同堂——四代に亘る家族一同が同居している——のご隱居さまなのだから。

老人の息子はもう五十を越えた人であり、息子の嫁はからだがずうつと弱くて、寢たり起きたりしているので、祁老人は一ばん上の孫の嫁を呼んできた。老人はこの孫の嫁が一ばんのお氣に入りだ。それは、第一には、この嫁は祁家のために子どもを生んで、老人に重孫と重孫女とをもたしてくれたし、第二には、彼女は家持ちが上手で行儀もよく、二ばんめの孫の嫁のように髮にアイロンをかけて鷄の巢のようにしておつて、見るのもいやだというようなこともなく、第三には、老人の息子は留守のことが多く、嫁もまた多病なので、事實上一ばん上の孫とその嫁とが、家を切りまわしており、そのうえ、孫は教員だから一日じゆう學校へ行つており、夜は翌日の授業の準備や作文の添削などをやつているので、家族十人の衣食や親戚、友人、近所などの吉凶の義理などは、ほとんどすべてこの孫嫁が一手に切りまわしている。これはなかなか容易なことではないので、老人が彼女を特別に可愛がつておるのも公平に見てもつともなことだ。それから、老人は北平で育つたので、たくさんの禮儀作法を滿洲旗人から見おぼえ、ききおぼえしており、その作法によると、息子の嫁は、しうとの前では、兩手をたれて侍立すべきものだということになつているのだ。しかし、息子の嫁は歳も五十を越えており、また病身でもあるので、兩手をたれて侍立するようなことをさせまいとすれば家法が立たず、家法を立てさせようとすれば、病身の女に兩手をたれて侍立させるに忍びないので、いつそのこと、家の重大なことはこの孫嫁と相談したほうがいいということになつたのだ。

祁老人の背は少しは曲つたけれど、家族全部のうちでは、かれが一ばん背がたかい。わかい頃はどこへいつても『背高の祁さん』といわれたものだ。かれは背がたか

く面長で、元來大いに威嚴があるべきだが、眼が小さくて、笑うと一本の線になつてしまうので、人々は、かれは背丈は高いが、別に畏敬すべきところがあるとは感じないのである。老年になつてから、かれはすこし見よくなつた。青黒い顔、眞白なひげや眉、目尻や頬には永遠に笑みをふくんだ皺があり、小さい眼はその皺と白い眉のなかに深くおちこんでおり、いつもにこにこしているように見えて、いよいよ溫和で善良そうな人相をつくりあげている。かれがほんとうに笑つたときには、小さい目からほんのすこし光が出て、あたかも無限の智慧があり、しかも一ぺんにこれを放出しないといつたようだ。

孫嫁を呼んではきたが、老人は小さいひげ櫛で輕く白ひげをすいておつて、ながいことなんともいわなかつた。老人は幼年のころ、小さい本を三册ばかりと六言雜字とを讀んだだけであり、少年時代、壯年時代には、あらゆる苦しみを嘗めつくして、獨力で家を買い、結婚したのだつた。かれの息子も、ただ三年ばかり私塾へあがつただけで丁稚に行つてしまつたが、孫の代の者になつてからは時勢がかわつてきたので、大學へ入つて勉强することになつた。現在かれはご隱居さんではあるが、學問となると、どうしても息子にはかなわないと思つている。息子はいまでも論語上下を暗誦することができるし、八卦見の先生からほめられたほどの立派な字もかく。孫にはなおさら及ばないので、孫たちから輕蔑されることをたいへんおそれている。それで、老人は家族どもに話をするときには、いつも、しばらくのあいだ默つておつて、自分が思慮ぶかい老人であることを示そうとする。孫の嫁は元來字もあまり多くは知つておらないし、一日じゆう子供をどなつたり、味噌だ醬油だとしやべつているだけの人間だから、そうする必要もなかつたのだが、老人はながい月日の習慣で、孫嫁にたいしても、すこしながく立たしておくという結果になつてしまつただけのことだ。

孫嫁は學校に入つたことがないから、先生のつけてくれるいわゆる學名なるものはなかつた。嫁入つてきてから、博士の學位でもおくられたように、夫から『韻梅』という名前をおくられた。韻梅という名はあまり運がよくないようで、けつきよく祁家では通用されなかつた。しうと、しうとめも、祖父も、彼女の名をよぶ習慣も必

要もなかつた。他の人達にしても、彼女はただ主婦であつて、『韵』にも『梅』にもなんら關係がないと思つている。まして、老人は『韵梅』と『運煤（石炭を運ぶの意）』とが同音である以上、意味もおなじはずだと思つている。

「全くだ、朝から晩まで忙がしく働らいているのに、お前たちはまだ石炭を運ばせる氣かい？」などと言われたので、それ以來、名前をおくつた夫さえ、その名をよぶのは具合が惡くなつてしまつた。それで、『大きい嫂（ねえ）さん』とか『かあちやん』とか身分上のそれぞれの稱呼以外は、『順兒の母さん』ということになつてしまつた。

順兒は彼女のちいさい男の子だ。順兒の母さんは顏だちは醜くはない、中肉中背で丸顏、眼は大きくぱつちりしている。彼女は歩くのでも、話をするのでも、ご飯をたべるのでも、仕事でも、みな早い。しかし、早いといつても決して、がさつではない。彼女は髮をすくのでも顏をあらうのでも、おしろいをつけるのでもなんでも早い。おしろいが具合よくうまくのつたときはすこしきれいに見えるが、おしろいののり方がむらなときにはあまり見よくはなかつた。しかし、おしろいがうまくのらなくて、人に笑われたときでも、彼女はすこしもおこらず、人といつしよに自分のことを笑つているのだ。生れつきのお人よしである。

祁老人は白ひげをすつかりすきおわると、また手で二三度かるくなでてから、順兒の母さんにいつた。

「うちの食料はまだどれくらいあるかな？」

順兒の母さんは大きくてぱつちりした眼を二、三回くりくりさせたが、老人の考えをもう推量してしまつて、てきぱきと答えた。

「まだ三ヶ月分はありますよ」

ところが、實際はそれ程たくさんはなかつた。彼女はほんとのことをいつて老人から叱言をいわれたくなかつたのだ。老人とこどもにたいしては、彼女は善意の嘘をいうのが上手だつた。

「漬物は？」老人は第二の重要事項を提出してきた。

彼女の答えは一そうてきぱきしていた。「たくさんあります。蕪の乾物、韮の漬物、澤庵などみんなあります」よしんば老人が實地檢分をするようなことがあつても、すぐに買つてきて置いとくことができた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

「それならいい」老人は滿足だつた。三ヶ月の食料と漬物さえあれば、天が落ちてこようが、祁家はもちこたえられるのだ。しかし老人はそれだけでこの用件の結末をつけようとはしなかつた。老人は孫嫁に個中の道理を說明せねば承知しないのだ。

「日本鬼（リベンクエ）（日本人を罵る語）がまたやりだしやがつた。フン、やるならやつてみるがいい。庚子の年（北清事變の年）八國聯合軍が北京城へ攻め入つて、天子さまさえ逃げさつしやつたが、わしの首をとることもしなかつた。八個國だつてだめだつたんだ、ちつぽけな日本のやつらだけで何ができるか。この北京は靈地だ、どんな騷動だつて三ヶ月以上は續かないんだ。だがしかし、あまり安心もしていられない、すくなくとも、とうもろこしの蒸しパンと漬物ぐらいなけりやならないからな」

老人が一言いうと、順兒の母さんは一ぺんうなずくかあるいは一聲「はい」といつた。老人の話は、彼女はすくなくとも五十回はきいている。が、やはりはじめてきいたような顏をしておらねばならなかつた。老人は自分の話を感心してきいている人があるとおもうと、しぜん、聲をすこしたかくし、人を感動させる力を强めようとした。

「おまえのしうとは、五十の坂をこしておつても、家の切りまわしとなつたらほとんどだめだし、しうとめといえば病氣の閒屋さんで、おまえが何か相談しても、ただフンフンといつているだけだ。この家は、全くのはなし、おまえとわしで持つているんだ。わしらが氣をくばらなけりや、家中のものは股引ひとつはけやしないんだ。ね、そうだろう？」

順兒の母さんは「そうです」とも「そうじやありません」ともいうわけにはゆかず、下を見て笑つているよりほかしかたがなかつた。

「瑞宣はまだ歸つてこないかい？」と老人はきいた。瑞宣はいちばん上の孫で順兒の母さんの夫である。

「今日は四、五時閒授業があると申しておりました」と彼女は答えた。

「フン、戰爭がはじまつたんだから、はやく歸つてくりやいいのに。瑞豐とあの氣狂い女は？」老人がきいたのは二ばんめの孫とその妻——髮を鷄の巢のようにしてい

る女だ。
「あの人たちは……」彼女はどう答えたらいいかわからなかつた。
「若夫婦はいつでも蜜を油でねつたようで、ちよつとの間も離れておられないんだ。ほんとに恥知らずさ」
順兒の母さんは笑つて「いまどきの若夫婦はみんなあんなもんですよ」といつた。
「わしは見るのもいやだ」老人はきつぱりといつた。
「それというのも、お前のしりとめがあまやかしているからだ。わかい女が一日じゆう、北海だの東安市場だのそれから——何だつたかな、それ、映畫だのと遊び廻つているやつがどこにあるか」
「わたしにはなんとも申せません」まつたく彼女にはなんともいえないのだ。かの女にはほとんど永久に映畫をみる機會などないのだから。
「小三は？」小三とは瑞全のことだ。まだ結婚していないので老人はまだ小三と呼んでいる。しかしかれはもうすぐに大學を卒業しようとしている男だ。
「全さんは妞子をつれてでかけました」妞子とは順兒の妹のことだ。
「小三はどうして學校へゆかないのか？」
「全さんは今わたしに長いこと話してくれたんですが、日本と戰爭しなけりゃ北平さえあぶないそうですね」順兒の母さんは早口ではあるが、はつきりといつた。「話をしているときに全さんはりきみかえつて顏を赤くし、拳をもんだり、掌をこすつたりしていました。わたしは全さんの氣をとりしずめた方がいいと思つて、一生懸命とりなし、どのみち祁家の人たちは日本人の氣にさわるようなことはしていないんだから、むこうだつて、わたしらにやつあたりしてくることもないでしよう、と申したんですよ。ところが全さんはわたしと日本人がぐるになつてでもいるかのように、わたしをにらみつけるんです。わたしはそれでだまつてしまいました。全さんはプンプンして妞子をひつぱつて出ていきました。わたしのことを怒つているんですよ」
老人はしばらく默つていたが心配げに言つた、「小三のやつは心配だ、そのうちに困つたことをしでかすかもしれない」

ちようどこんな話をしているとき、順兒が中庭であまえて叫んでいる。

「おじいちやん、おかえんなさい。桃を買つてきてくれた？　なに、ないの？　一つもないの？　おじいちやんだめだい」

順兒の母さんは室の中から言つた、「順兒、おじいちやんにあまえるんぢやないよ、まだわからずやをいつたちたたくよ」

順兒はそれでだまつてしまつた。おじいちやんが入つてきた。順兒の母さんは急いでいつてお茶をついだ。おじいちやん（祁天佑）は五十あまりの黒ひげの小柄な老人だ。身長は普通で、相當ふとつており、顏は丸く、眉毛が濃く、眼は大きく、髮とひげは多くて黑い、ちよつとした店の大番頭には、はまり役だ――げんにかれは五六間間口の呉服屋の支配人である。かれは足に力を入れて重重しく歩く、一歩ごとに顏の筋肉がゆれる。長年の商人だから、かれの顏はいつもおだやかで、鼻の上にいつでも笑い皺をつくつている。今日はしかし、かれの顏つきも平生とはだいぶちがつている。かれはそれでも強いて笑顏をつくつているが、眼には笑うときの光がない。鼻の上の笑い皺も深くはできないようだ。笑うときにも屈托なく顏をあげようとしない。

「どうした、天佑」といつて祁老人は手の指で輕く白ひげをつまみながら息子の黒ひげを見た。何かすこし不安があるようだ。

黒ひげの小柄な老人は變に不自然に腰をおろした。あたかも、白ひげの老人が彼に何かすこしばかり精神上の壓迫を加えたかのようである。父の顏を一眼みると、かれは頭をさげて低い聲でいつた。

「時局があまりよくありませんね」

「戰爭になりましようか」順兒の母さんは長男嫁の資格で大膽にきいた。

「どうも世間が騷がしい」

祁老人はゆつくり立ちあがつていつた「順兒の母さん、門をおさえる破れ甕を用意しておきな」

二

祁家の家は西城護國寺附近の『小羊圈』にあつた。ここは昔はほんとに羊の牧場があつたのかも知れない。ここは北京の普通の横町のように眞直か、あるいは、ちよつとばかり曲つているというのではなくて、まるで瓢簞のような形をしている。西の大通に通じているところは瓢簞の口と首で、非常に細くて長く、また大變きたない。瓢簞の口はとても狹くて、よく注意してさがすか、郵便配達にでも尋ねないと、うつかり通りすぎてしまう。瓢簞の首を入つて、家のそとの壁ぎわに積んであるごみを見つけてはじめて、コロンブスが海面に浮いているものを見つけて更に前進したように、腹を据えて中へ入つて行く氣になれる。數十歩もあるくと忽ちに廣くなつて、瓢簞の胸のところに出られる。そこは東西四十歩、南北三十歩ほどの丸い空地になつている。中ほどに大きい槐の木が二本あり、まわりに六七軒の家がある。さらに入つてゆくと、またひとつ小さい路地がある。それが瓢簞の腰だ。その腰のところを通りぬけてゆくと、また空地がある。そこは『胸』よりは二、三倍大きい。これが瓢簞の腹だ。この『胸』と『腹』がたぶん羊の牧場だつたのだろう。しかしそれは歴史家に考證してもらわねば斷定はできない。

祁家は瓢簞の胸のところにある。表門は西向きで、斜めに一本の大槐樹に向つている。さいしよ、祁老人が此の家屋を買つたときには家屋の場所が氣に入つたので買いとつたのだつた。彼はここが好きだ。この路地口は前にのべたように狹くて人の注意をひかないので彼に安全感をあたえた。瓢簞の胸のところに六七軒の家があることが、また彼に暖かさを感じさせた。門のそとはといえば、大槐樹が二本あつて子供たちの遊び場にいい。馬や車は通らないし、槐の實、槐の花、槐の虫などは子供たちの玩具にもなる。そのほか、場所は陋巷に過ぎないが、西は大通りに出られ、うしろは護國寺——七、八の

日には市もたつ――で、買物にも不便のほうではない。それでかれはこの家を買うことにきめたのであつた。

家そのものはあまり立派ではない。第一にかつこうが整つていない。屋敷は東西に長く南北に短く細長いから、シナ家屋本來のかつこうである北がわの一列の家屋と南がわの一列の家屋とを向いあつて建てることはできない。もし强いてそうすると、庭はせまい一本の線になつてしまつて、まるで汽船の三等客室の間の廊下のようになつてしまう。こういうわけで南の室二間は表門にぴつたりつけて建てられており、北がわの五間は庭の南の塀に面して建てられている。東の二間は庭の東の端にあり、その建物の北がわに小さい空地があつて、そこが便所になつている。庭の南の塀のそとは線香や蠟燭を賣る店の線香干し場で、何本か柳の木がある。この數本の木があるのがさいわいで、もしこれがないと、祁家の塀の南がわにはなにもないことになり、まるで停車場の建物のようで、門を出たらすぐ野原ということになるはずである。第二には、家の建て方もあまりしつかりしていない。北がわの家屋すなわち正房の材料が多少いいだけでその他はこれといつてほめられるようなものは何もない。祁老人が買いとつてからでも、南がわの家屋の壁と東がわの家屋の後壁はもう二回以上も倒れたことがある。塀――こわれた煉瓦と泥で積みあげたもの――が倒れることは毎年雨季にはきまつてのことだ。庭は一面に土を盛つただけで、煉瓦や石を敷いたりセメントで作つたりした通路はなかつた。雨季にはいつも庭の溜り水は一尺あまりにもなつて、出入には、はだしにならねばならない。

祁老人はしかし、この家がたいへん好きだ。そのおもな原因は、これがかれ自身で買いとつた財産であつて、かつこうや建築がどんなに悪くても、自慢してさしつかえないからだ。第二の理由は、かれがこの家を買つてから、祁家の子孫は繁榮して、一門が四代もそろつて同居――四世同堂――しているからである。ここはきつと家相方位などがいいにちがいない。一番上の孫、瑞宣が結婚したとき、全部の建物を徹底的に改築したのだ。その際には祁天佑が費用を持つた。――かれは父の買つた財産を代々傳え得る堡壘につくりあげれば、上は父に對し

ても申譯がたつし、下は子孫にたいしても顏がたつとおもつたのだ。木材の腐つたのは全部とりかえ、われた煉瓦も全部完全なのととりかえ、そのうえ、木肌の出ているところは全部ペンキをぬつた。かうして、この家は、相かわらずかつこうの整わないところはあるが、實質上は小羊圈では一、二にかぞえられる立派な家になつた。祁老人はこのあたらしい家をみて滿足の嘆息をもらした老人は六十歳の祝いをして、隱居することにきめてからは、かれの仕事は庭を美化することである。南がわの塀の根元にだんだん秋海棠、玉簪花、あじさい、ゆきのしたなどを植えた。庭のまんなかに大鉢の柘榴を四鉢、夾竹桃を二鉢、その他あまり手のかからない小さい草花の鉢などをたくさんならべた。このほか南がわの建物の前にも棗を二本うえた。一本には大きな白なつめがなり、他の一本には『はすの實』といわれる甘酸いなつめがなつた。

自分の家、じぶんの子孫、じぶんの植えた花や木をみて、祁老人はじぶんの一生の苦勞もむだではなかつたと思つた。北平城は不朽の城であり、かれの家も永世不朽の家である。

げんざい、天佑老夫婦が順兒をつれて三人で南がわの建物にすんでいる。五間ある北がわの建物は中の間を客間とし、客間の東西におのおの小さい入口があけてあり、瑞宜と瑞豐との寢室に通じている。東の端の室と西の端の室には別にそれぞれ入口があり、東の端の室は瑞全の、西の端の室は祁老人の寢室である。東がわの建物は炊事場で、米、石炭、薪なども積んでおき、冬になると柘榴や夾竹桃などをも取り込んでおく。さいしよ祁老人がこの家を買つたころは、東がわの建物と南がわの建物とを貸家に出さないと屋敷のなかが淋しすぎるぐらいだつたが、今はかれ自身の子孫だけでも入りきれぬほどになつた。家は一門の者でいつぱいになり、老人の胸もうれしさでいつぱいだつた。かれは一本の老木であり、そして屋敷いつぱいに枝葉がしげり、一枝ごとの花や葉はみなかれから生れでたのだ。

この街のことを考えてみても、かれは得意を感じるのだつた。四、五十年、かれはずつと住みついているのだが、隣近所の人々はいずれも、今日引越してきても、明

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo